

令和7年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

1 豊かな人間性と国際性の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> 学校行事、生徒会活動や部活動などあらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 震災に係る復旧復興ボランティアなど、校外ボランティアの推進・支援 地域貢献を目指した校内・各部・個人ボランティア活動の随時呼びかけ Google Classroomを活用した案内・募集 	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。</p>	<p>校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>84.9% B</p> <p>（R6同時期） 82.6% B [昨年基準] A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】昨年度同時期との比較では2.3ポイントの増加となった。取組の変化としては、クラスルームや朝礼伝達表等での呼びかけを昨年度より多く行ったことが挙げられる。また、昨年度と比較して連絡事項をChromebookで確認する生徒が増え、外部のボランティアの存在についても広く生徒に知らせることができた。</p> <p>【今後の対応】引き続き担任の先生方にも協力していただき、クラスルームや朝礼伝達表を活用しながら呼びかけを続け、ボランティアの必要性について生徒への理解を図る。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバルな視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 令和7年度地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業 	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている。</p>	<p>ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>82.0% B</p> <p>（R6同時期） 82.3% A [昨年基準] A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】2学期の探究活動では1・2年生でふるさとに関する内容を扱う場面が増加したことにより、昨年度とほぼ同水準まで上昇している。ふるさとに対する関心を持つ生徒が増加している。</p> <p>【今後の対応】能登地域の課題、解決方法を考える探究活動を継続して行い、地元への愛着をより定着させたい。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 異文化交流の促進 トビタテ留学JAPANなどを活用した留学希望生徒への支援 	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が高まっている。</p>	<p>4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>84.6% C</p> <p>（R6同時期） 91.7% A [昨年基準] A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【現状】留学プログラムや、海外研修の募集を利用する生徒が昨年度より増加しているものの、B基準にはわずかに達していない。</p> <p>【今後の対応】引き続き生徒に留学の情報を多数与え、成果発表の場でもさらに関心を深めさせる。</p>
学校関係者評価委員の評価		防災教育の拠点校として地域連携を模索し、多様なボランティアや国際交流を展開している点は高評価。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		地域通貨ポイント等の仕組みを活用し、生徒の主体的なボランティア参加を促進するとともに、活動の継続と活性化を図る。			

2 進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進し、主体的に困難な課題と向き合い考え抜く力を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 志を築くためのキャリア教育・東京大学主催の「高校生と大学生のための金曜特別講座（オンライン）」の実施 PASSLABO、ROJE、UTVC等外部教育支援 組織との連携 全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 学習時間調査 ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談・進路通信の作成 	<p>【成果指標】 （生徒学年別） 第1志望に対して明確な理由がある。</p>	<p>高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して</p> <p>A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 <生徒：1年生> 187人 15 5.8%A <生徒：2年生> 188人 13 4.2%A <生徒：3年生> 142人 11 5% A</p>	<p>【判断基準】 各学年目標1年120人（6割） 2年140人（7割） 3年160人（8割） Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】探究活動や外部の方との交流等の様々な企画の結果と考える。 【今後の対応】高い結果となっているが高校卒業後のビジョンの明確さに差があるのが現状である。今後は志望校等、より具体的に自分の将来について語れるよう指導していく必要がある。また、特に低学年については視野が狭まっていないかを検証する必要もある。生徒が納得した進路選択ができるよう支援を続けていく。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の可能性を最大限に引き出し、多様な大学入試制度の変化に対応できる進路指導を実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「GoogleClassroom 進路支援室」での情報発信 進路講演会 大学入試問題解法研究 習熟度別学習指導（週末課題） スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 金沢大学出張講座 多様な入試制度に関する研修会 	<p>【成果指標】 （1年生生徒） 学習習慣を身につけ、学力を向上させている。</p>	<p>入学後、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【7月進研模試と1月で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】 <生徒：1年生> 120人未満 C（118名）</p>	<p>【判断基準】進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較 1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】クロス分析の結果、偏差値を5以上伸ばした生徒は、81人であった。一方、5以上下げた生徒は41人であった。5以上伸ばした生徒は7月進研模試での偏差値が45～60の層に66人と多く、下げた生徒は同60～65の層で21人と多かった。</p> <p>【今後の対応】行事・イベントなど様々な機会を通して、生徒の進路意識を向上させ、学習習慣に繋げさせていく。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 保護者への進路説明会 学習計画の作成とチェック 志望校群別検討会（2年） 志望校検討会（3年） 出願校検討会（3年） 志望理由書の作成（1、2年） 批判的思考力育成 放課後学習会 	<p>【成果指標】 （1年生生徒） スーパー難関・難関大学入学に堪える学力を獲得している。</p>	<p>1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が</p> <p>A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満</p>	<p>【1月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】 <生徒：1年生> 30人以上 A（30名）</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】上位層は一定数いるものの、最上位層が育成されていない。また、教科バランスが悪く1月進研模試の3科目間で、偏差値が15以上の差がある生徒が47人いる。</p> <p>【今後の対応】得意科目はこのまま伸ばさせつつ、苦手科目へも粘り強く取り組めるように、高い進路目標を持たせ、そこに到達するために必要な取り組みを生徒とともに計画性をもって行う。</p>
		<p>【成果指標】 （2年生生徒） 学習習慣を改善するとともに、学力を向上させている。</p>	<p>2年次に、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【7月進研模試と1月で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】 <生徒：2年生> 120人未満 C（99人）</p>	<p>【判断基準】進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】文系生徒では数学、理系生徒では英語の数値が伸び悩んだため、総合偏差値も伸び悩んだと考えられる。</p> <p>【今後の対応】金沢大学合格圏内から難関大学合格にかけての、偏差値60～68の層が例年比で少ないため、授業や課題の内容を調整し、中位層の底上げを行っていきたい。</p>

	<p>【成果指標】 (2年生生徒) スーパー難関大学・難関大学合格に向けた、高い学習意欲と取り組みを継続して行い、改善できている。</p>	<p>1月進研模試3教科総合で学力到達度(GTZ)のSランクの生徒が</p> <p>A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満</p>	<p>【1月進研模試3教科総合での学力到達度(GTZ)】 <生徒:2年生> 20人未満 C(19人)</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】文系の生徒の成績上位層が例年に比べ少ないのは、教科バランスが乱れている生徒が多く、苦手とする教科の伸長がうまくいっていないためと考えられる。</p> <p>【今後の対応】前掲のように、中位層の成長が課題であるため、最上位層の個別指導は継続しながら、難関大の合格を目指す生徒に対する個別の指導を3年時より開始し、個別指導を拡充させていく。</p>
	<p>【成果指標】 (3年生生徒) 生徒ひとりひとりが高い志望を持ち、進路実現を果たしている。</p>	<p>スーパー難関大学の合格者数が</p> <p>A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満</p> <p>難関10大学の合格者数が</p> <p>A 20人以上 B 15人以上 C 15人未満</p> <p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 30人以上 B 25人以上 C 25人未満</p> <p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【大学入試結果】 <生徒:3年生></p> <p>スーパー難関大学 B 難関10大学 A 金沢大学 B 国公立大学 B</p>	<p>【判定基準】大学入試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】国公立大学全体で222件の出願中136人(合格率61.3%)の合格者を輩出し、生徒一人ひとりの学力が着実に合格へと結びついた結果となった。S難関への合格4人(東大2人、京大1人、医学科1人)に加え、難関10大学においても7割を超える合格率を記録した。また、金沢大学では、一般選抜で8割を超える合格率となった。各大学に対する指導ノウハウが十分に機能した結果と言える。一方で、国公立大学の一般選抜以外での選抜方式(総合型・学校推薦型等)の合格率は48.7%にとどまった。</p> <p>【今後の対応】各教科における基礎固めや記述対策など、本年度の合格に結びついた具体的な指導ノウハウを教職員間で共有し、組織的な指導体制として体系的に継承していく。変化する入試傾向を緻密に分析し、それに基づいた対策プログラムを継続・発展させる。これにより、高水準の合格率を堅持する。また、多角化する入試方式への適応および出願戦略の最適化が、合格実績をさらに底上げするための焦点となる。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>難関大学への合格実績を維持していることは評価できる。一方で海外進学希望者への支援も必要である。国内でも積極的に留学生を受け入れるなど国際的な感覚を身につけられる大学があるため、そのような進路に関する情報や選択肢を可能な限り提供することが望ましい。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>海外進学等の多様なロールモデルを生徒に示し、卒業生や外部機関と連携して最新の進路情報を提供する。また、個々のニーズに応じたきめ細かな情報提供を強化する。</p>			

3 教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・「石川県教員育成指標」を踏まえ、教職に必要な素養、教科指導力、学級経営力、生徒指導力などの実践的な指導力の向上に努める。</p>	<p>・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付</p> <p>・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施</p>	<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 100% B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉</p> <p>94.3% B</p> <p>（R6同時期） 95.7% B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度同時期との比較では1.4ポイントの減少となったが、94.3%と高い数値であり、生徒は概ねスマートフォンの安全な利用方法について実践している。非行防止教室や集会の際にSNSの危険性・ネットトラブル防止について啓発活動を行っているが、SNSの使用については不安を感じている生徒もいる。</p> <p>【今後の対応】 今後も非行防止教室や普段の学習指導を通して啓発活動を続けていく。また、生徒会執行部など、生徒の目線からもアプローチができるような取組を増やし、スマートフォンの使用マナー・安全な利用について考える機会を設ける。</p>
	<p>・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進</p> <p>・予習・復習の呼びかけ</p> <p>・「探究」で培った指導法に関する研修及び情報共有</p>	<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をしている」と答える生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をしている」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	<p>【12月実施第2回生徒による授業評価】</p> <p>83.1% C</p> <p>（R6同時期） 83.6% C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 前回から2ポイント増加、5教科全体でも3.5ポイント増加しており、粘り強い指導・声掛けの成果とみられるものの、昨年度同時期より0.5ポイントの減少であり、更なる学習時間の確保が必要である。</p> <p>【今後の対応】 国語・数学・英語の重要性を継続して伝えるとともに、授業へのモチベーションが下がらないよう、声掛け・チェックを行っていく。また、新1年生への初期指導をあらためて確認し、丁寧に実施していく。</p>
	<p>・校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。</p>	<p>【努力指標】 （教員）</p> <p>探究の要素を取り入れた授業を実践している。</p>	<p>「探究の要素を取り入れた授業を実践している」に関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 〈教員〉</p> <p>73.8% C</p> <p>（R6同時期） 62.8% D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度同時期より1.1ポイント増加したものの、十分でない。「探究の要素」を取り入れるのに適した題材・単元・授業例について、教科内での共通理解がまだまだ図れていない。</p> <p>【今後の対応】 各教科会で、「探究の要素」を取り入れるのに適した題材・単元・授業例に関して共通理解を図る。一定の期間を設け、そこで実施し、授業改善に活かしていく。</p>
	<p>・若手教員のニーズに合わせたOJTの実施</p> <p>・Teamsを利用した時宜をとらえた情報発信</p>	<p>【満足度指標】 （若手教員）</p> <p>OJTをとおして教員としての成長を実感できる。</p>	<p>OJTにより教員としての「知識・技能・指導力が向上している」・「やや向上している」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 〈教員〉</p> <p>90.0% A</p> <p>（R6同時期） 65.2% D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 情報の発信に積極的に取り組んだ結果となったと分析している。今後も情報収集と発信に努めていきたい。</p> <p>【今後の対応】 総合力を高めるために、1つの分掌・1人の教員からでなく、様々な分掌・様々なベテラン教員が指導に携わる必要がある。そのような体制の構築を検討したい。</p>

<p>・GIGAスクール構想に基づいて、1人1台端末を効果的に活用した授業を実践する力を身に付けることにより、生徒の学びの変容を促す。</p>	<p>・情報課やICT支援員による教員のICT研修の実施 ・好事例の共有</p>	<p>【努力指標】 (教員) Chromebookを生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践してる。</p>	<p>「Chromebookを生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 <教員> 29人 69.1% C (R6同時期) 69.8% C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】Chromebookの活用状況に関する自己評価が全体として数ポイント向上し、B評価に(限りなく)近い水準まで改善が見られた。これは、活用頻度や授業内での使い方について教員の認識が具体化しただけでなく、研修や実践を通して「実際に使えるイメージ」が共有されてきたことによるものと考えられる。特に、校内研修において効果的な活用方法を具体的な授業事例として紹介したことや、教科ごとの研究授業において担当教員が率先してChromebookを活用した授業を実践したことが、活用への心理的ハードルを下げる要因となった。また、生成AIの活用事例を紹介したことで、教員側の授業設計の幅が広がるとともに、生徒が自ら考え、試行錯誤しながら学ぶ環境づくりにつながりつつある点も、評価向上の一因であると推察される。一方で、教科特性によって活用のしやすさに差がある状況は依然として残っており、さらなる実践の蓄積と共有が求められる。</p> <p>【今後の対応】 今後は、これまでに蓄積された実践を校内で継続的に共有し、教科や学年を越えて活用のアイデアが循環する体制を整えていく。具体的には、生徒が自ら問いを立て、考え、振り返ることができる授業を軸に、Chromebookや生成AIを効果的に組み合わせた授業デザインを推進する。また、教科ごとの実践事例を可視化し、「自分の授業にどう取り入れるか」がすぐにイメージできる形で共有することで、活用の定着と質の向上を図る。これらの取組を通して、教員の実践力を高めるとともに、生徒が主体的に学ぶ授業の構築を学校全体で進めていく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>ICTや生成AIの活用が進み、添削業務の効率化や個別最適化学習への展開が試行されている点は先進的。データの共有化により教員の負担軽減にも一定の成果が見られる。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>AIを「使いこなす力」を生徒・教員双方が高め、捻出された時間を生徒との対面指導や「思考を深める壁打ち」に充て、デジタル化による余白を教育の質向上に繋げる。</p>				

4 魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・文理融合の視点で特色ある教育活動（SSH・NSH事業）を推進しその成果を全国的に普及する。さらに、小・中・高・大等と連携・交流を推進し、科学教育の水準向上を目指す。</p>	<p>学校設定教科「探究」の成果物等の他校への発信</p>	<p>【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。</p>	<p>本校の開発教材や報告書のダウンロード数が、前年度に比べて増加数が</p> <p>A 1000件以上 B 500件以上 C 200件以上 D 200件未満</p>	<p>【成果指標】 1000件以上 A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 SSHについては、今年度新しく掲載した融合プロジェクトポスターが平均123件（N=30）、理数科の課題研究論文が平均229件（N=10）、報告書が362件ダウンロードされており、これだけでダウンロード数は1000件を超えている。またNSHでは、ダウンロードが893件で昨年度より+61件である。 【今後の対応】 これまで通りの方法でダウンロード数は多く、十分発信できていると考える。しかしながら、もっと積極的な方法を次年度には実施しても良い。</p>
	<p>物理チャレンジ、科学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの積極的な参加や応募の奨励</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。</p>	<p>全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が</p> <p>A 4以上 B 3 C 2 D 1以下</p>	<p>【成果指標】 <生徒> 4件 A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 3件の研究が来年度の全国総文への出場が決定した。また、1件の研究が第16回坊っちゃん科学賞で優良入賞となった。 【今後の対応】 自然科学系の研究については、課題研究、SSCの研究共に、高いレベルを維持している。今後も質の高い研究を目指すとともに、多方面の学会等での発表をすすめていく。</p>
	<p>英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の奨励</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。</p>	<p>左記大会やコンテストに参加し</p> <p>A 入賞 4件以上 B 入賞 3件 C 入賞 2件 D 入賞 2件未満</p>	<p>【成果指標】 <生徒> 2件 C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 総文期間の出展のみの判定となるため、絶対数が少なかった。 【今後の対応】 引き続き各種コンテストに参加していく。</p>
	<p>・学校の災害対応力を強化し、能登の創造的復興を目指して、ひと・もの・こととつながり、社会問題を解決する力を育む。</p>	<p>・アプリの活用 ・AIを活用した効果的な学習方法の研究</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 2年生のGTEC12月受験でCEFR B1以上の生徒が昨年と同水準の人数である。</p>	<p>CEFR B1以上の生徒が</p> <p>A 120人以上 B 110人以上 C 100人以上 D 100人未満</p>	<p>【成果指標】 <生徒> 119人 B</p>
	<p>・専門家による講話 ・実践的な避難訓練の実施 ・防災知識に関するセルフチェックの実施</p>	<p>【満足度指標】 （生徒） 防災教育を通して災害への備えに対する意識が高まったことを実感できる。</p>	<p>「防災教育を通して災害への備えに対する意識が高まった」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 <生徒> 95.9% A 生徒対象調査（7、12月）</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 学校防災アドバイザー派遣事業、ブラインド型避難訓練、防災・災害への備えについてのセルフチェック、保健だより等を通して、防災について自分事として考える機会を設定することで、生徒の防災に対する意識は確実に向上した。 【今後の対応】 災害への備えに対する意識のみならず、実際の行動にも変化が現れるような働きかけを今後も継続して実施する。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>		<p>探究学習や部活動での全国レベルの活躍など、生徒の主體的な活動は成果を上げている。しかし、情報発信力や地域の認知度、災害時の物資補給や行政との連携には課題が残る。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>		<p>SNSや地域拠点（駅前商業施設等）を積極的に活用して生徒の活躍を可視化する。また、行政や支援側へ避難所としての情報を周知徹底し、民間製品の非常用備蓄セットなどの導入をすすめていく。</p>			

5 働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進めるとともに、「働きがい」を持って教育活動の質的向上に努める。</p>	<p>・情報共有のデジタル化 ・協業についての研修の充実 ・目標の明確化による達成感の共有 ・月2回の定時退校日を設定</p>	<p>【成果指標】 観点1 時間外勤務時間の平均及び80時間を超える人数が減少している。 観点2 ワークエンゲイジメント指標の平均が高まっている。（UWES）</p>	<p>観点1-① 時間外勤務時間の平均が A 40時間以内 B 45時間以内 C 50時間以内 D 50時間を超える 観点1-② 時間外勤務時間の平均が80時間を超える人数が A 3人以下 B 5人以下 C 7人以下 D 8人以上 観点2 ワークエンゲイジメント指標（UWES）の平均が A 4以上 B 3以上 C 2.6以上 D 2.6未満</p>	<p>【毎月実施勤務時間調査】 <教員> 観点1-① 48人 60時間 D [昨年度] D 観点1-② 48人 11人 D [昨年度] D 【12月実施仕事に関する調査】 <教員> 観点2 3.6 B [昨年度] B</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 <観点1> 【分析】時間外勤務時間の主要因は部活動及び探究活動による引率業務に係るもの、続いて教材研究、担任や主任業務にかかるものが多く、平日昼間に部活動ができ、学校閉庁日もあった8月は時間外勤務が少ない。時間外勤務は依然として大変多いが、中間評価より6時間減少した。また10月のワークショップの効果もあり11月以降は昨年比で減少幅が大きい。 【今後の対応】職員の要望を積極的に取り入れ、業務負担と勤務時間の縮減を図りながら、生徒の進路目標の実現に注力できる勤務体制を構築していく。 <観点2> 【分析】UWESの平均 4 …世界的にみても高い平均値 3 …日本における専門職の平均値 2.6…日本の平均値 本校平均値は3.6であり、中間評価（3.3）と比較し前向きな解答が増加している。一方で仕事への満足度が低いと思われる解答も一定数見られる。 【今後の対応】10月のワークショップを参考に業務改善へ向けた意見交換や試みを継続し、質量ともに満足度の高い職場環境の整備に努める。</p>
学校関係者評価委員の評価		45分授業の試行や朝礼の精選など、業務効率化に向けた具体的かつ大胆な挑戦を評価できる。これにより、教員の早期退勤や生徒の自習時間の創出などの好循環が生まれつつある。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	短縮授業による余白を、生徒との面談など信頼関係の構築に投資すること。一過性の取り組みに終わらせず、アンケート等で効果を検証し教育の質を維持しながら継続できる体制を整える。				